

○加藤美紀* 山本雅子**

(*広島女大, **広島文化女短大)

目的 食嗜好は個人差が大きく研究対象としにくいものであるが、最も重要な要因である味との関連の考察を通し、特性を見い出すことを試みた。

方法 18歳～19歳の女子学生92名について、甘味・酸味・塩味・苦味の官能検査を行った。試料としては各々、サッカロース・クエン酸・塩化ナトリウム・カフェインを蒸留水に溶かし、10段階の異なる濃度の溶液を用いた。又、同一被験者に4味についての嗜好をアンケート調査した。官能検査の4味の閾値の4数値と、アンケート調査の4味の嗜好を得点化した4数値の合計8つの数値を変数として、クラスター分析を実施し考察した。

結果 クラスター分析の結果、本研究の被験者は以下の5つのグループに類型化された。第1類型：甘味・酸味を好み、塩味・苦味を好まない。好む味覚の判別は鈍いが、好まない味覚の判別は鋭い。第2類型：好みは第1類型と同じである。判別は反対で、好む味覚の判別は鋭いが、好まない味覚の判別は鈍い。第3類型：甘味・酸味を好まず、塩味を好む。甘味・塩味・苦味の判別が鈍く、酸味の判別が鋭い。第4類：酸味・苦味を大変好まない。全ての味覚の判別が鈍い。第5類型：4味全てを好む。4味全ての味の判別が鋭い。